

# 京極読書新聞 <第104号>

発行日 令和元年12月20日(金)  
京極町生涯学習センター湧学館



## 京中生にインタビュー



平成30年度第29回京極町読書感想文コンクールで入選した中学生に、読んだ本のことや学校生活についてなどをお聞きしました。今の中学生はどんな本を読んでいるのでしょうか？

**太島 彩綺さん 中学1年 「パンプキン・ロード」**

**田居 寿一さん 中学1年 「きみに贈るつばさ物語」**



「パンプキンロード」森島いずみ／作（ティーンズ文学館，2013）  
「きみに贈るつばさ物語」あさのあつこほか／作（角川書店，2009）

—— 太島さんはどうしてこの本を選んだのですか。

太島 災害の怖さや家族の大切さを、みなさんに知ってもらいたかったからです。

—— このお話の内容を教えてください。

太島 主人公の早紀は震災でお母さんを亡くすんですが、お母さんの友人たちから薦められて、まだ会ったことのない、違う町に住む祖父と暮らしていくというお話です。

—— 太島さんはこの早紀についてどう思いましたか。

太島 自分と同じ年なんですけど、強い生き方をしている、うらやましいと思いました。

—— 「大切なものは目に見えない」という章が心に残ったそうですが、太島さんにとって大切なものは何ですか。

太島 早紀は自分にとって大切なものは「祖父」と気付いたんですが、私にとって大切なものはやはり「家族」です。

—— 読書感想文の後半で「大好きな家族がいなくても、人生を楽しくする方法がある」とわかったそうですが、どういう方法なんですか。

太島 私にはなかなかできないんですが、つらいことや悲しいことは涙をたくさん流して忘れて、いい思い出だけを心に残していくことです。

—— 最近読んだ本や見た映画やドラマのなかで、面白かったのは何ですか。

太島 今読んでいる「十年屋」という本です。大切なものを残すために、一つにつき自分の寿命1年をそれと引き換えるという話です。

—— 今太島さんは1年生ですが、小学校と中学校で何か違うことがありますか。

太島 授業を書き取るのに小学校は鉛筆だけでしたが、中学校ではシャーペンとかいろんなペンが使えるところが楽しいです。

—— 田居さんはどうしてこの本を選んだのですか。

田居 ノンフィクションからフィクションまで幅広いジャンルの話が、1冊にまとめられていてとてもいい本だと思ったからです。

—— 六つの話がありますが、特に心に残った話は何ですか。

田居 外国の子どもたちが低賃金で、長時間働かされている話です。しかも一日一食しかあたりません。

—— もし田居さんが同じ状況だったらどうしますか。

田居 つらくて他の国へ逃げるかもしれません。

—— 他に印象に残った話がありますか。

田居 「ヨキナマ、ヨキナマ」という話です。ヨキナマとは子どもの妖怪で、ふだんはなににも悪さはしないんですが、子どもが自慢話をすると、その自慢のものをとりにくると言われています。

—— この本全体を読んでどんなことを考えましたか。

田居 ここにでてくる子どもたちのことを考えると、日本がどれだけ恵まれているかがわかりました。

—— 小学校と中学校で何か違うことがありますか。

田居 各教科で先生が替わることと、部活動が増えてたいへんだけど、その分楽しみも増えました。



## 森 悠斗さん 中学1年「ペット」



—— 森さんはどうしてこの本を選んだのですか。

森 僕は犬が好きで、この本に出てくる犬たちがかわいいと思ったことと、内容も面白そうだったからです。

—— このお話の内容を教えてください。

森 二匹の犬のマックスとデュークが飼い主のいない生活をおくることになり、様々な困難を乗り越えていくうちに、仲が悪かった二匹が仲良くなっていく話です。

—— デュークの「今じゃおれたちは兄弟みたいなもんだ」という一言をどう思いましたか。

森 初めは仲の悪かった二匹が、兄弟のようになったのがすごいと思いました。

—— この本を読んでどんなことを考えましたか。

森 第一印象で相手を嫌いだと思うことは、良いことではないと思いました。徐々にお互いを知っていくことが大事だと思います。

—— 森さんはペットを飼ったことがありますか。

森 アレルギーなので飼ったことはありません。

—— 最近読んだ本や見た映画やドラマのなかで、面白かったのは何ですか。

森 今読んでいる「マリと子犬の物語」です。捨て犬を育てる話です。

—— 小学校と中学校で何か違うことがありますか。

森 部活動が盛んなことと、教科で先生が替わることです。中学校はたいへんなことも多いけど、先輩たちも多くて、今は楽しみの方が多いです。



「ペット」 澁谷正子／著（小学館，2016）

## 建礼門院右京大夫が見た平家の人々

——素顔の貴公子たち——(その3)

<『平家物語』を読む会> 村山 功一

### 素顔の貴公子たち (3) 重盛・宗盛 (しげもり・むねもり)

重盛



清盛の嫡男重盛については『平家』はもちろん、多くの記録、公卿の日記、伝承などに、一門随一の人格者とされています。もし、この人が長生きしていたならば一門の運命も違っていただろうと評する人もたくさんあります。特に有名なエピソードは、暴走しがちな父清盛を抑え、対立が激しくなった後白河院との板挟みに苦悩し「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず。重盛が進退これに窮まれり」と深く嘆き、「とく死なばや (はやく死にたい)」と神仏に祈り自分の命に代えて父の悪行を止めようとしたというものです。忠孝の間 (はざま) で苦悩し、それが元で病

を得て早世した人物という重盛像が定着しています。

《右京大夫》の眼に映った重盛は、実に颯爽としています。

重盛が大臣と大将を兼官するという荣誉に浴したとき (安元三=1177年)、そのお礼のために参内 (さんだい) した姿を〈そのご威光がすばらしく見受けられ〉、感動して歌を詠んだと述べています。また、内裏近くで火災が発生した折、人々が右往左往する中、中宮の御座所に駆けつけた重盛の颯爽とした武人らしい振る舞いを〈たいそうご立派で、雄々しく思われた〉と綴り、将来の一門を担う優れた人物という印象を抱いています。残念ながら四十二歳という若さで亡くなったことは、先に述べたとおりです。なお、この火災事件と重盛の様子は『平家公達草紙』にも、ほぼ同様の記述があります。

弟、宗盛は「平家」はもちろん各種伝承も優柔不断、卑怯未練な人物とされていますが、先の重盛に同行し自身の右大将昇進のお礼に参内した折、その姿がたいそう立派であったと《右京大夫》は述べています。次いで、いまでは“八島 (屋島) のおとど”と呼ばれている宗盛がまだ中納言であった頃、彼女が〈五節の折に櫛をください〉とお願いしたところ〈たいそう立派な櫛をくださった〉のだが、その櫛に歌を添えて無理に押しつけられたとあります。その歌には〈あなたに深い思いを寄せている私の心をお察してください〉と書かれていたと回想しています。

維盛、重衡に続いて宗盛までもが《右京大夫》に思いを寄せる歌を贈っている訳ですが、当時の宮廷世界では男性が女性に歌を贈る場合、恋文めいた歌を贈ることが一種の礼儀、社交辞令でもあったので宗盛の場合もそうであったのかもしれませんが。そうであったとしても、《右京大夫》が魅力的な女性であったことは確かなのではないのでしょうか。



宗盛

画像出典 「ビジュアル源平1000人」 (世界文化社, 2011)

P28…重盛、P30…宗盛、P120…清経の碑、P141…通盛

「現代語訳 日本の古典10 平家物語」P85…平経正と明神の化身白龍



#### (4) 通盛・経正・清経（みちもり・つねまさ・きよつね）

通盛（みちもり）は清盛の弟教盛の嫡男、中宮徳子にとっては従兄弟にあたります。生年未詳なので分かりませんが、たぶん同年代と思われます。

『右京大夫集』に通盛についての具体的な記述はありません。通盛の最愛の女性、小宰相（こざいしょう）の思い出の中に、微かに通盛の姿が浮かんでくる程度です。

小宰相は鳥羽天皇（第七十四代）の第二皇女上西門院統子の女房で、宮廷第一の美女であったといわれます。通盛は深く思いを寄せ、やがて二人は結ばれます。以来、都落ちから西海流浪の間も常に通盛の側に在り、“一の谷”では合戦の直前まで通盛の陣所に居りました。合戦を避け屋島へ逃れる船上で、彼女は通盛の討ち死にを知ります。悲嘆にくれた小宰相はその夜半、乳母が少しウトウトした隙に海中に身を投じました。

この知らせを聞いた《右京大夫》は、大きな驚きと悲しみの中に在りし日の小宰相と通盛に思いを馳せます。治承の頃のこと、通盛とともに小宰相を争ったある男性が結局失恋して嘆いていると聞き、その男性に慰めの歌を贈りました。慰めというよりく（小宰相殿を）通盛様に取りられて残念でしたね」というような、ちょっとからかっているようなニュアンスです。きっと《右京大夫》とも冗談を交わせるような親しい間柄だったのではないのでしょうか。事実《右京大夫》はくその頃はまだほんの戯れごとのように思っていましたと書いています。しかし、小宰相の死を知った《右京大夫》はくもしあなた（小宰相）が通盛様ではなく、あなたを慕っていたあの方と一緒にいたのなら、こんな悲しいことにはならなかったでしょうと、その死を惜しんでいます。



通盛

さらに作者は、当時、夫や恋人を失った女性は出家して永く亡き人の菩提を弔うことが常であったのに、自ら命を絶つという異例の出来事に大きな衝撃を受けると同時に、小宰相の通盛に対する愛の深さに感動し、また羨ましくも感じているのです。それは自身の資盛に対する思いへの自問でもあったのでしょう。

結局、『右京大夫集』における通盛は、小宰相のエピソードを通して想像するしかありません。それは宮廷一の美女と言われた小宰相から深く愛された通盛像でした。

同じく中宮徳子には従兄弟にあたる（清盛の弟、経盛の嫡男）経正（つねまさ）。彼も生年は不明です。経正が琵琶の名手であったことは有名です。『平家』は経正と琵琶にまつわる三つの章段を設けています。

まず、都に迫る木曾義仲を迎え撃つべく出陣する途中“竹生島明神（ちくぶじまみょうじん）”に参詣した経正がその社殿で琵琶を奏でると、そのすばらしさに感応した明神が白い龍となって現れたという話。次に一門都落ちの際、幼い日を過ごした仁和寺を訪れ、御室（おむろ※）である守覚法親王から拝領した“青山”という琵琶の名器をお返しする話。そしてその青山の由来を述べた章段です。いずれも名器青山を演奏するにふさわしい経正の逸話です。

平経正と  
明神の化身白龍

※御室（仁和寺の住職を指す。代々法親王が就任する）

一方『右京大夫集』の経正も、琵琶の名手としての姿が描かれています。先の維盛の項で触れましたが、西八条邸での春の宵維盛が笛を吹き、経正が琵琶を奏で、女房たちの琴と合奏した様子が述べられています。

次いで《右京大夫》は、管弦の遊びの後歌を詠み合った時に経正の歌を周りの人々が冷やかしたりからかったりして笑い合うと、真剣に歌の心を弁明する姿を、微笑ましく眺めています。そこに、琵琶の名手経盛の生真面目な人物像が浮かんできます。この経正もまた、一の谷で没しました。

小松（重盛）家の三男清経（第102号系図参照）は、一門と共に都落ちの後九州から四国の屋島に向かう途中、平家の前途を悲観して海に身を投じたと伝えられます。長兄維盛の入水に先立つ一年前のことでした。『右京大夫集』では、こうした伝承には触れず、清経の恋愛問題を語ります。かつて清経は斎院（式子内親王・後白河院の第三皇女）に仕えていた“中将の君”という女房に恋をします。中将の君と作者はとても親しく十三歳のころから歌の贈答をする間柄だったようです。清経から思いを寄せられた中将の君は、いろいろと思い悩んだ末 やっと受け入れる決心をします。ところが清経は同じ斎院に仕える別の女房に心変わりしてしまいます。それを知った《右京大夫》は、〈あなたの袖には、嘆きの涙がどんなにかこぼれているでしょう〉と同情と慰めの歌を贈ります。中将の君はその返しに〈あの方の言葉を真に受けて心が乱れてしまった自分自身がくやしいことです〉と詠んでいます。あまり感心しない清経像ですが、後年の入水という行為からもきっと繊細多感な人物だったのかも知れません。いずれにしても、『平家』や諸伝承が描かない清経の一面を捉えています。



清経の碑

#### 【『平家』の関連章段】

重盛…巻二「小教訓」「少将乞請」「教訓状」、巻三「医師問答」「無文」「燈炉之沙汰」「金渡」

宗盛…巻十「請文」

巻十一「鶏合壇浦合戦」「能登殿最期」「一門大路渡」「副将被斬」「大臣被斬」

通盛…巻九「老馬」「小宰相身投」

経正…巻七「竹生島詣」「経正都落」「青山之沙汰」 清経…巻八「太宰府落」

## 発行

京極町生涯学習センター湧学館  
〒044-0101 京極町字京極158番地1  
TEL 0136-42-2700(代表)  
FAX 0136-42-2032  
E-Mail [yugakukan@town-kyogoku.jp](mailto:yugakukan@town-kyogoku.jp)



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.jp>

